

巻頭言

2018年問題とブランディング

吉備国際大学 藪脇 健司

わが国の高等教育に携わる者の多くは、2018年問題に戦々恐々としているのではないだろうか。18歳人口は、第2次ベビーブーム世代のピーク(1992年)に205万人であったものが、近年では120万人前後で推移している。一方、18歳人口の減少に反して、高等教育機関への進学率は1992年では6割に満たなかったものが、2014年には8割に達している。つまり、高等教育機関への進学者は一定数を維持していた訳であるが、進学率の伸びにも陰りが見え始め、18歳人口も2018年度以降は再び減少に転じることが予測されている。この2018年問題によって、私立大学、専門学校は当然のこと、国公立大学も含めて淘汰されていく時代になるだろうと考えられている。

このような状況の中、各教育機関は生き残りをかけ、高校生に選ばれる学校として必死に独自色を出そうとしている。本学のような立地条件にハンデがある地方の私立大学は、その努力がことさら必要である。すなわち、ウィークポイントを補って余りあるストロングポイントを産出し、広報していくことで他校との差別化を図ることが求められているのである。そこで本学は「作業機能障害に強い学科」を標榜し、オープンキャンパスでは、(My) Occupation* というゲームを行って互いの大切な作業を推理したり、作業機能障害の種類と評価(CAOD)**などの教員や大学院生が開発したツールを用いて、参加者の作業機能を診断したりするイベントを行い、独自色をアピールしている。参加者からは、他校のオープンキャンパスと全然違うという主旨のコメントをいただくことが多いが、本学としては単なる差別化を越え、作業療法士養成課程としてのブランディングを図ることを目標としている。

奇しくも、わが国の作業療法教育は転換期を迎えている。2016年にWFOTの作業療法教育最低基準は改訂され、7年間の移行期間内に基準を満たす必要がある。また、作業療法士学校養成施設指定規則も改正され、2019年度入学生より適用される予定である。現在の高等教育機関を取り巻く状況を考えると、これらの変革をむしろチャンスと捉えるべきではないだろうか。作業療法の世界基準に対応することは、この職種のオリジナリティを明らかにすることに寄与し、新しい指定規則等に合わせたカリキュラムを検討することは、各養成施設の特徴を打ち出す絶好の機会となる。そして、カリキュラムの改訂を通して、養成施設のブランディングを図る視点がますます重要になってくるであろう。高等教育機関として生き残るためのターニングポイントは、まさに今なのであることを強く意識しておきたい。

* (My) Occupation : 作業科学的推理ゲーム (東京スカイツリーライン OTcafe 考案)

** Teraoka M, Kyougoku M (2015) Development of the Final Version of the Classification and Assessment of Occupational Dysfunction Scale. PLoS ONE 10 (8) : e0134695. doi:10.1371/journal.pone.0134695.